島木赤彦の北海道旅行

宮川康雄

一

大正六年八月、島木赤彦は北海道への長途の旅行をしている。この年赤彦は、五月に郷里の諏訪から家族を呼び寄せて東京市外雑司ケ谷亀原に一戸を構え、『アララギ』の仕事に本腰を入れて取り組む態勢を整えた。同時に『信濃教育』の編輯主任の職を引き受けたことから、毎月、東京・長野・諏訪の間を往復するという繁忙の中に身を置くことになっていた。

北海道といえば、民間人が開拓に着手してからまだそう長い年月を経ておらず、一部を除いては未開といっていい地域であった。そのような土地に、赤彦はなぜこの時に旅行したのであろうか。赤彦自身はこのことについて殆ど何も書き残していない。またこの旅行について詳しく考察した論稿もない。そのようなことからこの旅行は赤彦伝記上の疑問の一つとなっているのである。

そこで、本稿では、このことを中心として赤彦の北海道旅行全体にわたって考察してみたい。

二

赤彦の北海道旅行の目的は何であったか。大正六年六月二十八日に記した『アララギ』の七月号の「編輯所便」において、赤彦は、「八月号は七月二十日迄に出して、小生一寸旅行するつもりに候。この旅行必要に候へば止める事出来ず、云々」と書き、続いて、八月号の「編輯所便」でも、「小生の北海道行は私用のために有之、会員諸君に御逢ひし得るや否や分らず此の儀悪しからず願上げ候。」と記している。このことから北海道旅行は、急を要する私用によるものであったことはまちがいない。しかし、その用務は何であったかということになると、判然としないのである。それで、従来このことをめぐっては、さまざまな推測が行われてきた。借金のためであるとか、墓を建てるためであるとか、赤彦自身の女性関係に係わることであるとかというような推測である。

それらのうち聞くべきものは、伯母の展墓と弟の「家をもつ」ことに係わるものであったろうという推測である。北海道詠の中にこれに関する歌が含まれているからである。しかしその具体的事情はどうかということになると、従来皆目不明であったと言わなければならない。

北海道への旅行の準備が少なくとも七月初旬には始まっており、その目的地が後志国小樽または余市であったことについては、高木今衛宛の七月十一日付の書簡に、「上野より北海道小樽（若くは余市大川町）迄の三等汽車賃と大体の日案御知せ願上候」とあることから明らかである。高木今衛は国鉄に勤務していたから、遠隔の未知の地域への旅行をするについて「日案」を立てさせたのであろう。八月六日付で旭川の田中弥藤次（筆名、芥子沢新之介。当時、新之

助）に宛てて差し出した書簡には「御用も候はゞ後志国余市大川町三溝与八郎方小生へ御知せ被下度候。」と記していることから、連絡先が同所であったことが知られる。はじめに予定した出発日が八月三日であったことも、池崎忠孝に宛てた八月一日付書簡に、「明後日私用に北海道へ参るべく候。」とあることから明瞭である。

ところが、『アララギ』同年八月号の「編輯所便」を見ると、釋迢空が、「赤彦氏は八月上旬より北海道旭川迄」旅行すると記しており、また、赤彦が芥子沢新之介に宛てた八月三日付の書簡でも、先の引用のすぐ前に、「小生九日頃貴町へ参り可申御面談を得ば幸甚存候。」と書いている上に、旅行に出立後、八月六日に平泉から中原静子（筆名、閑古）に宛てて送った書簡に、「北海道はオホツク海迄行つて来たいと思つてゐます。」と記しているから、この間に赤彦の気持ちが動き、上川盆地よりさらに奥地にまで行ってみたいと思うようになっていたことが推測される。

上野駅から青森までの往路は東北本線に乗車することにしていたが、帰路については秋田県仙北郡六郷町の高橋哲之助宛の八月三日の書簡に、「帰途秋田県通過致し候忙しく候ゆゑゆる〳〵御面会六ケ敷候へ共御都合により一列車の間位大曲町へ下車してもよろしく候此事丹羽富次君へも御知せ申置候」と記しており、青森から福島までは奥羽本線まわりで戻る予定を立てていたことが知られる。この書簡には「秋田県に入るは十日か十日過と存候」と書いているが、斎藤茂吉が八月五日付で門間春雄に宛てて送った書簡には、「赤彦が北海道に行った。十二、三日頃大兄の処へ寄る筈だ。」とある。

以上によって、北海道旅行に際して予定された日程をほぼ窺うことができるであろう。

赤彦は五月号の「編輯所便」において今後毎月の面会日を十五日と二十四日に変更する旨会員に対して通知したばかりであった。そしてそれ以後面会日の変更のことについては何も触れておらず、また、旅行後の八月二十六日に胡桃沢勘内に宛てた書簡を見ると、「長野へは十六日に来るべき筈の処大へん後れて相済まず松本を素通り致し候儀申訳無之候」とあることから八月十四日までには帰京、十五日に会員に会って、その日の夜行で東京を発ち、十六日には長野に行くつもりでいたのではなかろうか。

赤彦が実際に雑司ヶ谷亀原の家を出たのは、八月四日の夜であった。一日遅らせたのは、翌日が日曜日に当たることから、仙台で会う石原純の都合に合わせたものであるかも知れない。石原純は『アララギ』創刊以来の同人であるが、東北帝国大学理科大学で教職に就いており、日曜日の方が都合がよかったであろう。赤彦としては、八月の十一、十二の二日間、諏訪教育会が開催する夏期講習会の講師を純に依頼するについて何程かの役割を果たしていたのであるから、事前に直接に説明しておきたいこともあったであろう。

上野駅を四日の夜に出て翌五日の早朝、宮城県の仙台駅に下車した。この日は純を訪問、純の案内で松島・塩釜の名勝に遊んでいる。妻の不二子に宛てた書簡には塩釜神社に詣でたことを記している。松島の瑞巌寺にも立ち寄ったのであろう。松島は『奥の細道』の旅で芭蕉が目的地としていた名所である。明治二十六年に芭蕉の足跡を追って東北地方を旅し「はて知らずの記」を書いた正岡子規もここに寄っている。

この夜は仙台市内の純の家に泊まった。翌六日の午前四時過ぎに仙台駅を発ち、岩手県に入って、平泉駅で下車、奥州藤原氏の遺跡中尊寺を見物した。中原閑古に宛てて「今朝六時半ここに着き金色堂拝見大したもので驚き入りました。今夜は浅虫（青森のそば）に

泊り明日北海道に入ります」と、感想とあわせて行動の予定を知らせ、また他の一通では、「中尊寺の山中で漆の紅葉を見ました蜩が鳴いてゐました足の下に北上川と衣川とが白く光つてゐました北の方は重い雲でとぢられてゐましたはるく道の奥へ来たと思つて見ました」（大正六・八・六付書簡）と陸奥深く入った感想を記している。毛越寺は寺跡を存するのみであったから、寄らないで過ぎたとも考えられなくはないが、この地で過ごしたのは六時間である。やはり立ち寄ったのであろう。

芭蕉は中尊寺も訪れているが、子規は仙台から直ちに山形方面に向かったのでここには来ていない。『アララギ』大正六年七月号の「編輯所便」には「平福百穂氏は六月上旬中尊寺に遊ばれ、帰途門間氏を訪ねられ候。門間氏の病気追々快方祝著存じ候」との記述があり、百穂が六月に訪れたことが知られる。赤彦は百穂の話も聞いていて、自分も寄ってみたいと願っていたであろう。

再び東北本線に乗車して、北上した。

川上に来たりておそきわが汽車の吐く湯気かかる川原の石に
雲のゐる谿ふかくなりて水おそき川原の石に鶺鴒(せきれい)啼くも
谿川に石うつりする鶺鴒の動きの疲るこの真昼かも

これは「岩手以北」と題した歌である。漸く陸奥の旅にいることの実感が湧いてきた。

終着青森駅の三つ手前の浅虫駅で下車したのは、浅虫温泉に一泊するためである。青函連絡船は一日に二度青森港を出航する。赤彦はここで翌日の汽船の出航時刻まで時間調整をすることにしていたのである。温泉に到着したのは夜の九時過ぎであった。

赤彦が宿をとった旅館は、しかし、期待に反して快適さに欠けていたらしい。「山がすぐ海に迫つて海岸はごつごつした岩山です。そこに小さな村があつて温泉が沢山出てゐる。暗い汚い室に一夜我慢しました。今夜北海道行。」と翌七日に不二子に宛てて書いている。中原閑古宛に送った同日の葉書にはさらに詳しく、「山が直ぐ海に迫つて海岸はゴツ〳〵した岩山ですそこに小さな村があつて温泉が沢山湧いてゐます青森の東二つ三つ目の停車場です座敷の内に一方に爐が切つてあつてそこへ火を持つて来ました高い処に暗いランプが懸つてブリキの笠が錆びてゐます隣室のこの宿の赤子がよく泣きました持上るに重いほどの銅の金だらひが浴室にあります今夜北海道に渡ります」とあり、次の一首が添えられている。

温泉に入りて一夜眠りぬみちのくの岩山の下に波のよる音

当時、青森港と函館港を結ぶものは、鉄道省経営の連絡船田村丸（一四七九トン）か比羅夫丸（一四八〇トン）である。明治四十一年の春に相次いで就航したイギリス製造の新鋭鋼船であった。両港間の距離は六〇マイルであるが、青森港では桟橋と船との間を艀を用いて結ぶので、津軽海峡を渡るには五時間を要した。

連絡船は、七日の午後五時に青森港を出航し、九時十五分に函館港に着いた。函館港では大正四年六月に桟橋が完成していたので連絡船は桟橋に横付けになった。

函館桟橋駅で函館本線の釧路行急行列車に乗り換えた赤彦は、奥地に向かった。汽車はやがて道南地方を抜けて、後志国に入った。

赤彦が下車したのは余市駅である。函館から余市までの距離は一四五・五マイルあり、所要時間は、約七時間四十分である。余市に到着したのは八日の午前六時少し前であった。

北海道に入ってから最初に下車した駅については、小樽駅であっ

たと考えられやすい。『氷魚』に収められた「北海道」の連作では余市の歌より小樽の作の方が前に排列されているからである。しかしそれは赤彦のこの地への到着を七日と記述しているものと同様に誤りである。

余市は北海道の西北部、積丹半島の付け根に位置し、アイヌのユーカラではイヨティーンと呼ばれている土地で、かつて先住民のアイヌが大集落を作っていた。北は日本海に面し、深い湾があって、海産物に富み、旧幕時代からの北海道における漁業の一大拠点であった。このため明治十五年八月には早くもこの地の沢町に電信電話分局も開設されていたのである。

この町はまた林檎の産地としても広く知られていた。

北後志の産業・文化の中心であった余市は、北海道の中では人口も多く、『余市町勢』（大正七年版）によれば、大正五年時点において現住戸口は三千二百七十二戸、人口は一万八千九百三十三人を数えた。そのうちの最大は、戸数九百九十四戸、人口五千四百六十七人の大川町である。

赤彦は余市駅近くの大川町に薬店を営む三溝家を訪ねた。

三

三溝家の当主与八朗は、赤彦の従弟であった。与八朗は赤彦の祖父、旧幕時代に諏訪高島藩の桶職を務めた塚原七郎右衛門則（五一）の長女、たかの一人息子である。たかは天保十年十月二十五日に生まれ、安政三年八月に隣郡の東筑摩郡元洗馬村の三溝与七（天保七・四・一三生）に嫁し、四人の女子を設けたあとで与八朗を生んだのである。赤彦の実父塚原浅茅はたかの弟であり、明治九年十二月十六日に生まれた赤彦は、十一年六月九日生まれの与八朗よりも二歳の年長であった。

赤彦が余市駅に下車したのは、まずこの従弟に会う必要があったからである。必要とは、赤彦の異母弟塚原瑞穂に関わることであった。それで、このことについていくらか詳しく述べなければならない。

元洗馬村の上層農民で、当主が寺子屋師匠を務めたこともある旧家三溝家の長子与八朗が北海道に居住することになった事情から記したい。

与八朗の父与七は、明治になってからいち早く靴を履き、ブドー酒を飲むというハイカラな人で、始終東京に出ていて、帰ってきては大法螺を吹く人であったという。しかも家産を失った上に早くに死亡した。

与八朗はこのために明治二十五年十月数え年十五歳で家督を嗣いだ。しかし姉の夫（三溝一族の者であった）に辛く当たられたことから家出をし、松本で働いた後に十九歳のときによりよい働き場所を求めて北海道に渡った。菓子屋に奉公したり、鰊漁場で働いたり各地を転々としているうちに道庁の所在地札幌で「一の秋野」を屋号とする薬種業者に奉公することになり、やがて暖簾を分けてもらって、明治三十五年に余市に「一の三溝薬房」を開業したのである。

家業に精を出し、明治三十七年三月に北海道檜山郡泊村の鈴鹿キンを妻に迎えて子供も生まれた。家業が順調に発展すると与八朗は、郷里の叔父塚原浅茅に、末子瑞穂が高等小学校を卒業した後には薬学校に進学させるように勧めた。薬学校卒業後は北海道に呼び寄せることを条件として学費を出すというのである。当時、北海道では薬剤師の需要が増していた。それと共に、これについては次のような事情があったと考えられる。

道庁から許可を受けて薬種商を営んでいたものの、与八朗自身は、薬剤師の資格を持っているわけではなかった。資格がなくても免許鑑札を受けた者は薬種商を営むことができたのである。ところが、明治二十二年三月以来法律第十号によって規定されていた「薬品営業並薬品取扱規則」が明治四十年四月に改正され、翌四十一年一月から施行されることになった。それによれば、薬剤師の資格を有する者でなければ劇薬など指定薬品の販売が許されなくなり、また、地方長官の許可を得た場合であっても、薬剤師または薬剤師を使用する薬種商から得たものでなければ販売または授与することができなくなった。与八朗が今後薬種商の仕事を手広く行おうとすれば薬剤師の資格を持つ者を身近かに置く必要が出てきたのである。

瑞穂は温厚な性格で、学業成績が優秀であった。しかし父親の浅茅は薄給の小学校教員であり、子供たちが次々と結核に罹患し、亡くなったことから医薬費も嵩み、家計は相当苦しかった。その上、この頃には諏訪中学校を卒業した瑞穂の兄葦穂の進学問題もかかえていた。瑞穂を進学させるにしても学費の支弁には困難があったのである。

明治四十一年三月南大塩尋常高等小学校の高等科四年を一番の成績で卒業した瑞穂は、こうして「私立東京薬学校」に進学した。入学資格の満十六歳に達していなかったのを年齢を一年ごまかして入学したという。この薬学校は、藤田正方が明治十三年に自宅に開いた薬舗学校に源を発する、東京の私立薬学校としては最も歴史の古い学校で、現在の東京薬科大学の前身である。制度上は乙種に属していたが、授業科目には薬学に関する専門科目のほかに和漢文や日本史などの一般教養科目もあり、内容的には甲種に近く、私立の薬学校としては充実していた。

瑞穂は明治四十四年四月に薬剤師学説試験に合格、続いて六月に薬剤師実地試験に合格して数え年十九歳で同校を卒業した。「私立薬学校」を校名としていた時期の同校が明治二十二年六月に第一回卒業生を出してから数えると、瑞穂は四十四回生である。卒業成績は同期六十三名中最優等に属する六番であった。

同年六月十五日付で薬剤師試験及第証書の下附を受けた瑞穂は、六月二十一日に帰郷し、七月下旬に北海道に渡って、余市の与八朗の家で薬剤師として働いた。

この瑞穂が渡道したのは、赤彦が広丘小学校長から玉川小学校長に転任した直後である。赤彦は瑞穂の帰郷前の五月二十六日に中原閑古に宛てて次のように書いている。「私の末の弟は薬剤師に合格して六月に北海道に行きます　そして店の番頭になります　貧しき家庭に生れて苦しい経験をした弟は北海道の店の番頭になれた事を非常に喜んで居りまする私は衷心より彼の幸福を祈ります　私は彼にもう二三年逢ひません　こんな事を外の人に話しても同情してくれません」

赤彦はまた、この年の七月号の『アララギ』に「遠く行く幼弟に」と題する四首の歌を載せている。(1)

貧しき家に生れて遠き国に行くべきものと思ひ行くかも
ちゝはゝは老いていますと思ひつゝ行きゆくまゝに遠く行くらん
五月雨の青葉の家に安らかにしづかに汝れをおく時過ぎぬ
生れたる家にいくらも住みあへず薬をもりて奥蝦夷の家に

与八朗が郷里から母親のたかを呼び寄せて同居したのもこの頃である。たかは夫の在世中苦労のしどおしであったが、夫の死後は娘と一緒に暮らしていたのである。

たかは孫たちの話によると、人柄の優しいひとであったそうである。

たかの亡くなったのは大正三年四月十一日の朝で、この日の払暁に昭憲皇太后が崩御されたことを聞いて、「それでは私もお供をする」と言ってまもなく息を引き取ったという。数え年七十六歳であった。老齢でもあったが、直接の死因は胃腸病であったらしい。

たかの遺骸は余市の大川町を見下ろす山の上に葬られた。その後、現在では塩尻市に編入されて塩尻市大字洗馬となった同地の浄土宗東漸寺にも分骨埋葬されている。

瑞穂はこのたかの亡くなった大正三年に三溝家を出て、小樽の色内町七丁目で薬種商を営んでいた谷黒荘平薬局に管理薬剤師として務めた。そして同年の暮れに同じ町内の望月内科病院に入院するということがあったらしい。大正元年の暮れに望月温象が開業してまもない新しい病院である。

ところで、瑞穂は、この病院に入院中に、ここで看護婦として働いていた女性と知り合い、相愛の仲となったのである。

周囲の者は、瑞穂の熱望にもかかわらず、結婚には反対であった。この女性には派手で身持ちのよくない女であるという噂が立っていたからである。しかも女性は瑞穂より年長であった。

女性の名は、桜永愛（戸籍の表記は、ェイ）といった。後年愛自身が身近な人に語ったところによると、父親は福井県の士族で、婿入りしたものの、養家が気にいらず、妻子を捨てて家出をし北海道に来て道庁に務めた。芸者上がりの女性と結婚して、一男一女を設け、高級官吏として豊かな生活をしていたという。愛は自分では庁立高等女学校を出たと言っていた。

外見はふっくらとした日本型美人であったが、性格が派手で、髪をつけ、鍔広の帽子を被って、街中を歩き、当時の小樽でも目立つ存在であったという。

周囲の者が二人の結婚に反対したについては、望月病院の院長の夫人が瑞穂を自分の妹の婿にと望んでおり周囲の者もよい話と思っていたのに、瑞穂が支障になる話を持ち出したというような事情も絡んでいたという。いわば、温厚な瑞穂が、年上の悪い女に引っ掛かったというように思われたのである。

与八朗は親戚の子供を預かっているという責任感から思い止まらせようと説得に努めたが、若くて一途な気持に燃える瑞穂にはその話に耳を貸す暇はなかった。二人は周囲の反対をよそについに同棲を始めた。

ことの次第は与八朗から父親の浅茅のもとに報告された。意外な報告に驚いた浅茅は、自分のあと塚原家を嗣ぐことになる葦穂に話し、葦穂から赤彦のもとに報告がきたのである。

当時の民法によれば、入籍が認められて正式に結婚するためには戸主の同意が必要である。瑞穂の熱望はもちろん戸主の浅茅に受け入れられなかった。

赤彦がまず余市に下車したのは、すでに明らかなようにこの瑞穂の問題について与八朗と話す必要があったからである。浅茅はすでに数え年七十四歳で、小学校教員を退職してから奉仕を続けてきた白山社他三社の社掌（神職）の職をこの年の六月十七日に退任するほどに老衰が進んでいた。他家に養嗣子となっていた身とはいえ、浅茅に代りうる者は赤彦のほかにはいなかったのである。

赤彦の意見は、いま瑞穂に反対しても何の効果もないであろう。そうかといって、瑞穂の希望が塚原家として聞きいれることのできないものであることは当然である。そのことを瑞穂に対しては明確

にしておく必要がある。その上で今後の推移を見守ることにするというようなものであったらしい。

浅茅はその意見を聞き、赤彦を代理として余市に遣わすことにした。同時に与八朗の多年の労に謝し、実姉たかの墓参を兼ねさせることにしたのである。

与八朗の案内で赤彦がたかの展墓をしたのは、余市に到着したこの八月八日の午後であったろう。

たかの墓は、三溝家のある大川町から余市川を西へ越えた対岸の共同墓地の一角にあった。この当時余市橋は架せられていなかったから大川橋を渡ったのであろう。いまでは美園墓地と名付けられているこの通称墓場山は、山というより丘といった方がよいくらいの低い山で、その斜面一帯が墓地になっていて墓石が林立している。赤彦が訪れた大正の初めにはまだ墓石もまばらであったであろう。その頃には、麓にはせあかしやの樹が茂っていたほかには、山上まで一面の笹原であった。

山に登ると、たかの墓は、山上からやや東に下ったところに、斜面なりに大川町の方を向いて建っていた。余市の即信寺（真宗大谷派）の住職から付けてもらった法名は「釈尼妙秀」であるが、当時の墓の状況はいまでは詳しくは分からない。この墓は昭和十五年八月に与八朗によって山の西側の麓に近い所に建て替えられた。新しい「三溝家累代之墓」の墓石は三段の積石の上に据えられた大きなもので、積石には三階菱の家紋が刻まれていた。この墓はその後、昭和六十三年八月に寺の山内の墓地に再度移転され、墓石もさらに新しいものに替わっている。

たかの墓所から見下ろすと、目の下には余市川が緩やかに海に向かって北流している。川岸には漁船がもやい、流れの先には左手からモイレ山（茂入山）が海に突き出し、余市湾が望まれる。ここから海までの距離はおよそ一キロである。この日ははじめ晴れていたが、そのうちに風が吹き、曇ってきたらしい。夏は海霧のかかる季節である。海上から霧が押し寄せてきて海はやがて定かには見えなくなった。

はろばろに来つるものかも笹原の高みの上ゆ見ゆる青海
笹原の曇りにつづく大海を遠しとも思ふ近しとも思ふ
おほ伯母の墓は磯べの笹の原海より風の吹く音やまず
われ一人立ちて久しき笹山に海風吹きて曇りをおくる
のぼり立ち見る笹山は小さくて海はてしなしおくつきどころ
北蝦夷の地のはてしと思ひ立つ笹山の風は騒ぎつつあり
笹の中のみ墓のまへに心親し従弟と二人物打ち語る
　信濃国茅野の停車場に伯母を送りしは何年の昔なりけむ
おのが子と共に住まむと遠く来て永久に帰らず笹原の土に

赤彦は郷里の茅野駅に渡道するために旅立つ伯母を父と共に見送った当時を思い起こした。そして長い間その場に立って、伯母の一生を思って感慨にふけった。たかの墓の前で与八朗の話を聞き、赤彦は日暮れに山を下りた。

この夜は三溝家に泊まった。与八朗と一夜を語り明かし、「従弟より伯母の晩年のことといろいろ語り聞かさらる」と詞書して、次の歌を詠んでいる。

忙しみ常忘れゐて七年ののちなる今日に涙流るも
蝦夷のはてに命終れりこれの世に只一人なる子に抱かれて

与八朗の長子の与市が後年回想するところによると、赤彦はこの余市にいる間に与市の案内で小学校を訪問し、校長と面談したという。多分それは、赤彦が三溝家に一泊した翌日のことであろう。訪問したのが余市町に設置されていたいくつもの小学校のうちのどれであったは不明であるが、おそらく大川町の大川小学校であったろう。なぜ訪ねたのかについては明らかではないが、六月に信濃教育会の機関誌『信濃教育』の編輯主任の職を引き受けたばかりであるから、校長に会って道内の教育事情などについて話を聞こうとしたものであろうか。当時の大川小学校の校長は久田儀兵衛で、その前の明治四十四年から大正二年までは中村重太郎であった。中村はすぐれた経営力をもつ進歩的な教育家で常に国内有名校の視察を怠らず、後には奈良女子師範学校附属小学校から新しい教育法を導入し、大川の学習法として道内に広く知られることになる新教育の実践者であった。赤彦は明治の末から大正初年にかけて小学校の校長や郡視学を務め、全国初等教育界の動向には注視を怠らなかったのであるし、明治四十五年の春には信濃教育会から派遣されて上京し、帝国教育会主催の全国小学校教員会にも出席している。その間に、余市の教員とも何らかの繋がりができていたとも考えられる。あるいは北海道の短歌作者には小学校の教員が多かったので（たとえば余市小学校にも中島哀果などがいた）、それらの人々の消息を聞くためであったかも知れない。

赤彦が余市を発ったのは、八月九日の夜である。一時間足らずで中央小樽駅（現在の小樽駅）に着き下車したのは、いうまでもなく瑞穂と会うためである。

小樽は函館と並ぶ北海道の門口で、陸海運輸の重要な接続地である。後志支庁に属するものの、道庁の所在地札幌に近く、早くから商都として発展し、明治三十四年九月には区制が敷かれ、四十三年四月には勅令により小樽高等商業学校も創立されている。赤彦が訪れた頃の人口は十万を超えるほどで、街は活気に満ちていた。

小樽の繁盛の様を目の当たりにして赤彦は驚いたらしく、郷里の長男政彦に宛てて八月十日付で「小樽は中々盛な土地で一寸驚きました。」と書き送っている。もっとも海に臨み山に倚るという坂の街小樽の市街地はさほど広くはなかった。

右の政彦に宛てた書簡には、続けて「昨日瑞穂に逢ひました。今日もこれから訪ねて来るはづです。」と記しているから、瑞穂とは九日の夜と十日に会ったのである。

世事の常識に富み、万事について配慮の行き届く赤彦のことであるから、瑞穂の勤務先の主人谷黒荘平も訪ねて懇ろな挨拶をしたのであろう。しかし、赤彦自身が瑞穂のもとを訪れたのかどうかについては明らかではない。桜永愛に会ったのかどうかについてもはっきりしない。

赤彦はあるいは自分が宿とした駅附近の旅館に瑞穂を呼びつけて、瑞穂の桜永愛と結婚したいとの希望について父の浅茅が不同意であることを改めて宣告し、瑞穂に自覚を求めたのではなかろうか。赤彦自身も不賛成であるとの意思を伝えたのであったろう。

しかし瑞穂の気持ちは動かすことができず、一応の始末をつけるにも予想外に時間を要したらしい。

赤彦は加納巳三雄宛の書簡によれば、小樽にとどまっている間にアイヌの家を見にでかけているが、これも瑞穂の問題の処理に係わっている間に時間の空白ができたためであろう。余市はすでに述べたようにアイヌの一大拠点であった。江戸時代の寛文年間に起こったいわゆる蝦夷地の大乱においてシャクシャインが謀殺されたあと

アイヌの勢力が地を払うことになったのは幸田露伴が「雪紛々」の「引」で慷慨しているとおりの悲劇的事件であるが[2]、このときにも余市のアイヌは和人との和睦に重要な役目を果たしたという。そのアイヌはかつて川村と呼ばれた余市の大川町に大集落を作っており、明治十六年にはなお五十戸を存していた記録がある。後にアイヌの歌人として名を知られる偉星北斗（本名、偉星滝次郎）の家もその中にあった[3]。赤彦が小樽に来てからアイヌの家を見に行ったのはすでにその伝統的様式の家屋は大川町にはのこっていなかったからであろう。平福百穂はアイヌの画を描くために明治四十年に北海道に渡っているが、赤彦の頭の中にはこの百穂のアイヌの画のこともあったであろう。

こうして赤彦が小樽で予定外の時間を費やしたのはやはり瑞穂の問題について現実的な処理をして、一応のケジメをつけなければならなかったからであることは言うまでもない。

『氷魚』の「北海道」の連作の中に、「小樽に弟を訪ふ」と題した、

北蝦夷の海べの町に家をもつ弟の顔はまだ子どもなり
波のよる浜べの町に家をもつ弟の顔は未だ子どもなり（初出）

という歌があることを根拠にして赤彦の渡道が瑞穂の結婚式に出席するためであったろうと推測することは、上述のようにして誤りである。三溝与市は生前瑞穂の結婚式に出るためであったことはまちがいないと語ったというけれども、与市は当時小学生であり、挙式の場所や出席者についても記憶を持っていなかった。赤彦の右の歌によって瑞穂が「家」を持ったのは確かであろうが、それは結婚式を挙げたというようなことではなく、同棲の現実がやむをえず黙認されたのだと言っていい。

小樽で時間を費やしたためにオホーツク海を見たいという赤彦の希望は実現が困難になった。その希望を聞いて旅程を組んでくれたであろう高木今衛に宛てて赤彦は、十日に「用事の都合で未だここにゐる網走へは一寸ムツカ敷くなり候」と予定どおりにはゆきそうもない旨を伝えている。

四

北海道に来た主目的を果たした赤彦は、十一日の朝の釧路本線の急行列車に乗って、さらに奥地を目指した。出発の前夜の八月十日の夜に旭川の芥子沢新之介に宛てて、「拝啓明十一日新得迄行き引きかへして午後十一時卅分旭川駅著駅前の三浦屋宮越屋のうちに泊り翌十二日諸兄に御逢ひ可申御承知被下度候」と書き送っている。これによると小樽から直接に旭川に行くのではなく、一旦新得に行き、そこから引き返して旭川に着くというのである。十一日に釧路行の車中から秋田県の高橋哲之助に宛てた書簡に「今晩旭川泊明十二日夜十一時卅分発十三日夕方五時頃函館発青森著の上は直に乗車して貴地（大曲）下車可致」と書いているところからみても（車中で電報を受け取ってすぐ書いたものか「電報正に拝見」として、「青森十三日午後十一時発大曲へ十四日朝六時廿分著」と追記している）、時間的に余裕のない状態にあった赤彦がこのような行程をとっているのは、旭川からさらに北上してオホーツク海を見ることが困難になったことから、その代案としたものであるか、当初からの旅程であったのかについては判然としないが、おそらく前者であろう。

この行程は石狩国と十勝国の境界となっている狩勝峠を越えることを目的としたものであるにちがいない[4]。狩勝峠は国鉄の難所であると同時に、北海道の全線中車窓の展望第一と称せられ、後々まで

も赤彦の郷里長野県の篠ノ井線の姨捨駅、鹿児島本線肥後矢岳駅の展望とあわせて国鉄の三大観として知られた景勝の地であった。

右の書簡に「諸兄に御逢ひ可申云々」とあるけれども、北海道のアララギ会員はこの頃函館近辺に僅かに数人を数えるくらいで、他には旭川にこの年六月に入会したばかりの芥子沢新之介がいた程度であるから、「諸兄」とはこの地域の短歌の作者で中央の歌誌に歌を出していた青年たちを広く指したものであろう。

東京出発時に旭川行を予定していたのはこの地が道北地方の中心となる奥地最大の都市であり、さらに奥地に向かってオホーツク海沿岸に出るためにも通過しなければならない交通の要衝である上に、芥子沢新之介がいたからであろう。北方防備の重要性を重視する政府によって早くから開発が進んだ土地で、明治二十九年に札幌に置かれた旧第七師団司令部も明治三十三年には早くも同地に移されている。大正三年に森鷗外がここに来ていることを赤彦が知らなかったとしても、明治四十四年に摂政宮（大正天皇）が行啓され、数日間駐蹕されたことはなお記憶に新しかったであろう。

しかし奥地に向かう赤彦の脳裏に最も強くあったのは、失意のなかに世を去った親友大森忠三の面影であったにちがいない。赤彦が長野師範学校の同級生であった大森忠三にいかに畏敬の念をもって対していたかは、『信濃教育』の大正九年二月号に載せた「亡人録」の中の「大森忠三は伊那産である。これは少し人柄が大きかった。云々」と記している一節によっても明らかである。(5)

忠三は長野師範在学中の明治二十九年の三年生の夏に、やはり同級生で親友であった太田水穂の言を借りて言えば、「北海道探険」の旅に出た。水穂も言うように当時は、「北海道と云へば、アイヌと同時に熊を聯想する不毛の山地であった。」（「旧友亡友」）のである。この忠三の北海道への旅が当時の周辺の人々にいかに大きな感激を与えたかについては水穂も前記の文章の中に特筆して回想している。

忠三はこの旅で直江津を出て海路北海道に向かい、小樽に上陸、北上して離宮予定地になっていた上川盆地の旭川に達し、神居古潭から増毛峠を越えて宗谷岬に到って、オホーツク海を望んでいる。途中山中で二度までも熊に出会ったという。

赤彦が乗車した釧路行の急行列車は、中央小樽駅を、時刻表どおりならば朝の六時四十四分に発車した。汽車は山地の後志地方から石狩平野に出、一時間余にして道都札幌を過ぎて、北に向かった。三時間余で滝川駅に到着すると、ここは釧路本線の分岐点である。ここから汽車は南行して落合駅に達し、補助機関車を連結していよいよ狩勝峠越えにかかるのである。

狩勝峠を越えるには、落合駅から約八キロでスイッチバック線になっていた狩勝信号所に達し、最急勾配千分の二十五の急坂を上るとやがて狩勝トンネル（九五四メートル）に入る。着工六年にして明治四十年に完成、九月八日に開通して東西北海道を鉄路で結んだトンネルである。(6) ここを過ぎると石狩国から十勝国になり、また千分の二十五の勾配を下って新内トンネル（一二四メートル）を抜け出て新内駅に着いた。ここをさらに千分の二十五の急勾配で下っていくと、新得駅に着くのである。落合――新得間の最小曲線半径は十五チェーン（約三〇二メートル）であった。

このルートが開通するまでの本線は、旭川を経由していたが、大正二年十一月十日に、滝川――下富良野間（五七・六キロ）が開通したことにより、同年十二月からは滝川駅が起点となり、この方が本線になった。この峠越えのルートは昭和三十九年に新狩勝トンネ

ルが貫通して西へ迂回する新狩勝線が開業した昭和四十一年十月には廃線となり、現在ではその一部が僅かに実験線として残されているのみである。

この峠を越えたときの赤彦の感激は、非常なものであったらしく、「今日は石狩十勝の国境を通り候汽車は螺旋状にめぐりくて嶺に上りそれより又めぐり〳〵て山下につき候遠望の有様深森(原)と天と相接し驚嘆致し候」(大正六・八・一一　久保田不二宛書簡)、「遠望する處只天と森林のミに候ここは十勝川の水源地に候」(大正六・八・一一　中原静子宛書簡)、「昨日は石狩十勝国境の峠を越しました鉄道が螺旋状にめぐりめぐつて山の上に出ます十勝一面の森林が天と接してゐます一寸驚きましたこの停車場の下猶四哩餘下りて新得といふ駅あり」(大正六・八・一二　藤沢実宛書簡)と書き送っている。

峠を下り切ると明治四十年に設置された新得駅がある。ここに大正六年四月には新得機関区が設置され、続いて同年十一月に落合保線区も移転された。補助機関車は、この駅で連結が解かれるのである。

ところで、この日のうちに旭川に到着するためには途中の駅で下車し、引き返さなければならない。前夜芥子沢新之介に出した書簡で赤彦は新得まで行き引き返すことを知らせていた。それで『赤彦全集』の「年譜」に「新得に到り」とあるのを始めとして、みな同じく、新得から引き返したことを記述している。しかし、赤彦が下車し上り列車に乗り換えたのは新得駅ではない。当時の汽車時刻表によると赤彦の乗った釧路行の急行列車が新得駅に到着するのは午後二時五十二分であるのに上りの汽車が同駅を発車するのは午後二時二分でありこれ以外に汽車はない。これでは当日中に旭川に着くことができない道理である。そこで新得駅の手前の新内駅で乗り換えたものとすると、下りの汽車の新内駅発車が午後二時三十一分であるのに対して上り列車の同駅発車は午後二時三十分である。つまり、上下線の列車は新内駅で擦れ違うのであるから、これなら引き返すことが可能である。時刻表をさらに詳しく調べると、新内駅では乗り換えのための時間の余裕も十分にあることが分かる。新内駅も新得駅と同じく上川郡屈足村に属していたとはいえ、両駅の間には十二・二キロの距離があるのである。

汽車は再び狩勝峠を越えて約二時間で下富良野駅(現在の富良野駅)に着いた。赤彦がこの駅で下車したのは、旭川に行くにはここで富良野線に乗り換えることになるからである。

この日赤彦が先の高木今衛宛の書簡に記した予定どおりに行動していたとするなら、赤彦はこの十一日の午後十一時半には旭川駅に到着したであろう。

ところがこの下富良野駅で佐野翠坡に会ったことから、赤彦は思いがけずこの地に一泊することになった。

赤彦が下富良野駅に到着したのは午後四時五十二分で、乗り換えのための待ち時間が五十分ほどあった。その間この駅に翠坡が務めていることを知っていた赤彦は翠坡に会った。

翠坡についてはいまでは知る人が少ないが、短歌史の上ではもっと顧られてよい人であるから、いくらか筆を費やしておきたい。

佐野翠坡は本名佐野光雄と言い、明治二十一年に青森県弘前市に生まれ、学校を卒業して後、明治三十九年に十九歳で上京、尾崎紅葉門下の柳川春葉の書生となった。その後帰郷して青森で『陸奥日報』の記者となったが、この間に『陸奥日報』『東奥日報』などに和田三菡や加藤東籬などと並んで短歌を発表した。その作品は『万朝報』や『文章世界』など中央の雑誌や新聞にもしばしば掲載され

たことから、当時の投書歌人としては誰知らぬ者のないほどの人であった。翠坡はその後再び上京して春葉の家にいる間に尾上柴舟の『車前草』の同人にもなっている。

北海道に渡ったのは、明治天皇の御大喪を機としたものであるという。

渡道してからは国鉄に勤務したが、創作欲は衰えを見せず、作歌活動にも熱を入れた。小田観蛍が『北海道歌壇史』(「明治三十年以後——大正十年頃」の項。北海道歌人会発行、昭和三二・一)に叙述しているところによると、翠坡は観蛍と並んで『北海道旭新聞』の常連であった。

若山牧水が大正二年八月に太田水穂の後援を得て第二期『創作』を復刊するとこれにも投稿し、大正四年七月に水穂が牧水と協力して『潮音』を発刊すると観蛍を誘ってこれに加盟し、四号からは歌壇諸家と同等の一段組の待遇を受ける作者となった。

赤彦はむろん翠坡の名はよく知っていた。『アララギ』と『潮音』とは互いに広告を掲載しており、広告欄に掲載される『潮音』の目次には毎号のように翠坡の名前が見られたからである。翠坡が赤彦の名を知っていたことは言うまでもない。

下富良野駅で翠坡に会ったことも、それからのことについても赤彦自身は殆ど何も書き残していない。狩勝峠越えに続くこの日のことはしかし、赤彦の北海道旅行において記憶すべき出来事となったのである。

翠坡は近くに若い歌人が集まっているから同行するようにと赤彦を誘った。

その誘いに乗って赤彦が訪れたのは、下富良野から一駅滝川の方に寄った所の島ノ下である。

この地は、天然の原生林の中に明治三十五年になって三戸が入地して開拓を始めてからまだ年月を経ておらず、戸数が三十戸あるだけの未開地に近い所であった。御料局からの貸下地が六戸に分割されたことから六戸と呼ばれていたのを、大正二年に滝川——下富良野間の鉄道が開業したときに鉄道省が島ノ下駅を設けたことから島ノ下と呼ばれるようになったのである。

ここに大正五年の五月に周辺の地区を合わせて五十五戸の児童四十五人の下富良野尋常高等小学校島ノ下特別教授場という単級学校が設けられ、流王八百一が赴任していた。八百一は帰去来という筆名を用いて俳句や短歌を作っていた。それで近辺の文学に関心を持つ青年教員などが月例会を催す場所の一つとしてこの教育所の宿直室なども使われていたのである。

この日の歌会の場所が果たしてこの宿直室であったのかどうかについては、後述するように疑問がある。けれどもこの日は土曜日であり、ともかくこの地で歌会が開かれることになっていたのである。

翠坡が赤彦を伴って現れたその場の様子を小田観蛍は『素』五号(昭和四一・七)に掲載された増谷竜三、細井剛等との対談の中で次のように語っている。

「翠坡は妙な男で私たちが歌会をしている時、何の知らせもなく「君たち何をしているのだ」「島木先生がおいでになったのに何をしているのだ」と入ってきたのです。私たちはまた翠坡独特な言い方だと思っていると島木先生が立っているのです。(中略)地織木綿の縞の単衣ものを着て麦藁帽子をかぶり、柳でつくったバスケット、下駄をはいていました。ちりめんのへこ帯をしめて、それっきりです」「私は夏ですからワイシャツ一つになっておりましたが私はカラーをかけて挨拶しようとしてもなかくかゝらない。赤彦はそ

のまゝでいゝですよと云ったが、ネクタイをしめて礼をした。」。

その場にいたのは、観蛍、流王帰去来のほか、三上煤煙子・宮川黎明（桃舟）らであった。「翠坡が先生ひとつ御批評願いますといったんです。」「赤彦は私を水穂の弟子だということはわかっていたんですが、水穂と赤彦とは師範学校時代同期で同じ布団にねて財布も一つにしていたということは私も分かっていた。」。

この場にアララギの会員がいるはずはむろんなかったが、集まっていた青年たちはみな赤彦の名前はよく知っていたのである。

赤彦ははじめ初心者の歌を挙げて褒めた。次に「これですね」と言って挙げたのは、観蛍の「風はいや吹きつのるかも山の木のさやぐを見つゝ雨戸を閉ざす」という一首であったという。

このあと歌会がどのように進んだのかについては分からない。旭川で翌晩赤彦に面会した芥子沢新之介は『アララギ』の「島木赤彦追悼号」に、「先生は既に島の下温泉の歌会を済ませられ、石狩十勝の国境狩勝の大高原を御覧ぜられ御帰京あそばさるる順になり居り申候。」と歌会が行われたように記している。しかし実態としては、以後座が賑やかになって、歌会らしい歌会は行われなかったらしい。

赤彦は青年たちに向かって旅行談もした。観蛍は「北海道短歌史私記」（『物語・北海道文学盛衰記』昭和四二・六）の中で、「一口でいうと、批評も旅行談も一語一語周到に語り、さすがと深く感心させられた。」と記している。また、『素』五号の対談では、「はなしをした内容はおどろいたものです。立派で。（中略）人の顔をみないで目を閉じて話をする。そして話は一糸乱れずそのまゝ筆にしておったら名文ですね。」「私は偉いなと思った。」とも回想している。観蛍と同じ感想を翠坡も横山武夫に語っているから、その場にいた者はいずれも同様に感じたのであろう。

赤彦はまた小さな手帳を示したが、それには作歌のメモが刻明に記されていた。横山武夫は翠坡の話を、次のように記している。「そのときの印象を語ってくれましたなかに今も私の忘れ得ませぬことは、赤彦の作歌のためのメモの非常に刻明、詳細であること、メモが詳細でありますのは、対象の凝視、観入の態度のきびしく、すさまじいこと等によるのであると翠坡が感嘆して語った言葉であります。」（『わが心の島木赤彦』百四十四話）

観蛍によると、手帳のメモには下の句だけを記したものが沢山あったという。「彼の歌が往々上句と下句で不鉤合なのはこのように下句を先に作って後上句をつける為でしょう、」と観蛍が後年感想をもらしていたと二階堂睦子は「赤彦の北海道旅行――北海道文学ノート7」（『原始林』第九巻第二号）に記録している。

赤彦はこの夜同地に泊まり、観蛍と二人で一室に寝た。観蛍の語るところによると赤彦は積極的に話しかけ、二人は教育や文学について語り合って殆ど暁に到ったという。

観蛍の本名は小田哲弥、明治十九年に岩手県に生まれて明治三十三年十五歳の時、新天地を求める父親に従って渡道した。赤彦がこの地を訪れた時には下富良野近くの鳥沼教育所という単級学校に訓導兼校長として只一人で務めていたのである。赤彦より十歳年下の三十二歳であった。赤彦は教員としても経験豊富な大先輩になるので、教えを乞いたいことも多く持っていたであろう。

赤彦は前年の『アララギ』十二月号に「歌集「深林」の著者に呈す」を書き、前田夕暮がこの年九月に刊行した第四歌集『深林』に対してきびしい批判を加えていた。さらに今年に入って三月号の『潮音』誌上で太田水穂が自分の歌と歌論について「著しく主観を

忌避」するものと批判したのに対して、五月号の『アララギ』に「太田水穂氏に与ふ」を書きはげしく論駁していた。「写生の要諦」は「外的事象の描写に非ずして内的性命の唯一真相の補足」であり「表現」であると赤彦が自己の写生についての見解を宣明したのは前年の『アララギ』三月号においてである。赤彦はこの自説を引いて水穂の写生歌についての理解の浅薄を衝こうとしていた。こうした自説についても赤彦は観蛍に説いたのであろう。

また赤彦は今井邦子や藤沢古実のことなどくだけた話しもしたらしい。

観蛍は当然聞く側に立つことが多かったであろう。しかし観蛍も僻地にありながらも『創作』が創刊されると早くもこれに投稿したり、明治四十三年八月には一号で終わりはしたものの、金崎白明（琢磨・哀草果）などと北海道における短歌雑誌の嚆矢となった歌誌『白鷗』を発行したりした熱意ある作歌者で、今や『潮音』に属して有力作者の一人になっていたのである。観蛍が明治四十四年八月に十勝岳で遭難、山中を彷徨した後にアイヌに助けられたのは東京新聞の電報欄を騒がせたほどの事件であり、この登山の時の歌は大正四年八月号の『潮音』に掲載されて高い評価を得ていた。観蛍からはこの遭難の体験なども語ったのであろう。赤彦の「北海道」の連作の中に十勝岳を詠み込んだ歌のあるのは多分観蛍からその話を聞いたことと関係があろう。作歌の一方で独学ながら日本の古典の研究にも力を注いでいた観蛍は、赤彦にとっても十分に話し甲斐のある相手であったにちがいない。(7)

ところで、ここに疑問に思われるのは、赤彦と観蛍がこの夜宿泊した場所についてである。観蛍は『素』の対談において「二人は簡易教育所の宿直室で夜を徹して語り明かしました。」と語っているし、自分が分担執筆した『北海道歌壇史』でも同様のことを記述している。しかし二人が宿泊したのは島ノ下温泉ではなかったであろうか。

赤彦が八月十二日付で旭川から父浅茅に宛てた書簡を見ると、「昨夜山中の一小村に泊まり今日ここに参り候」と記しているだけで宿泊場所については明記していない。しかし新之介は『アララギ』の追悼文で、「島の下は旭川の南方石狩野をゆく空知川のほとり、煙を吐く十勝嶽に向ふ山ふところの夏は青葉に悉く囲まれ人籟を全く絶てる小湯治場に有之候。ここに先生は深更に至るまで歌論談笑あそばされ候由に有之候。」と島ノ下温泉に宿泊したことを記している。さらに歌誌『樹氷』の編輯責任者で『島の下郷土史』（昭和五三・一二）の執筆者の一人でもある山下緑朗は、「観蛍先生の懐旧談によると、宿は堀川温泉の一室で、赤彦の話がなかなか興味深く、私と寝ながら夜明けまでも語り合ったという。」と観蛍の直話を記録しているのである。

堀川温泉とは通称島の下温泉のことで、実際には温泉ではなく、鉱泉である。明治三十九年（一説に明治四十一年）に仙夫により発見されたのを渡辺辰造が御料局から借受けて温泉宿を経営し、渡辺温泉と呼ばれていたが、大正二年以後、堀川亀太郎が引き継いで経営したところから堀川温泉と呼ばれることになった。島ノ下温泉とはいうが、温泉のある場所は、泉地区で、ここは現在島の下地区が富良野市に属しているのに対して芦別市に属している。島ノ下駅や小学校（平成二年三月閉校）のある所から、芦別市との境界をなす尻岸馬内川を渡り、北西に二十分余り歩いた空知河畔の高台にあった。現在その跡は荒廃しているが、当時の道は釧路本線（現在の根室本線）の古いトンネル口から暗い原始林の中を抜けてここに通じ

ていた。諸病に効くというので客があったのである。

赤彦の「北海道」の連作の中に十勝岳（海抜二〇七〇メートル）を詠み込んだ、

真向ひの十勝が嶽の名を知らぬ夫婦木を伐れりこの森の中に

という一首があるけれども、この歌はおそらくこの温泉宿の裏山あたりにおける嘱目であろう。島ノ下の教育所の付近からは目の前の山に遮られて十勝岳の山容を望むことはできない。

また、島ノ下教育所の建物は前年の十二月に建築されたばかりで宿直室も新しかったとはいえ中央からの客人である赤彦を泊める場所としてもふさわしいとはいえない。

こうしてさきに観蛍が島ノ下教育所の宿直室で語り合ったと語り、書き残したのは記憶の錯誤によるものであり、実際に歌会が催され、二人が一室で寝たのは島ノ下温泉であったと断定して差し支えないであろう。

もっとも翌日翠坡が女性歌人たちを教育所に連れてきたけれども、赤彦がすでに出発した後であることを知ると自分を島ノ下温泉に誘ったけれども殆ど徹夜で語り合って疲れていたので応じなかったと観蛍が語っているのをどう解すべきかは一つの問題である。しかし、これについては、この日が日曜日に当たることから、赤彦の出発を見送った観蛍が、睡眠の不足を補うためにここで仮眠をとっていたものと見れば容易に解決ができるであろう。(8)

辺りの原始林の中には名を知らぬ樹木も交じっていた。赤彦は翌朝、樹木の名を観蛍にたずねたが、観蛍もその名を知らなかったという。

この日は「六戸」という集落の地名の由来となった開拓者の家の辺りにも行ってみたらしい。赤彦の歌によるとそれらは掘立小屋で、家裏の畑には馬鈴薯と蕎麦が栽培されていた。水田のないこの地区では馬鈴薯や蕎麦は開拓当初から主食とされていたのである。

赤彦が島ノ下駅を発ったのは午前十一時半過ぎである。下富良野駅に戻り、富良野線に乗り換えて、旭川に向かった。下富良野駅から旭川駅までは五四・八キロで、所要時間は約二時間である。午後二時頃に着いた。

石狩川の支流である牛朱別川と忠別川の間に発達した旭川は、この地方の産物の集散地として急速に発展を遂げていた。大正三年には区制も敷かれ、人口も七万に達していた。

旭川駅前の宮越屋に宿をとった赤彦は、六条通西十二丁目に住む芥子沢新之介を訪ねたが、奥地に旅行中とのことで留守であった。

新之介が赤彦を宿に訪ねてきたのは、夜になってからである。そのときの赤彦の様子について、新之介は先の追悼文の中で、「先生は白地の単衣に兵児帯を締めて無造作に座り居らせられ候」と表現している。「迂生を前に拙歌御選評くだされ「名詞止めはいけない。万葉あたりには立派な名詞止めもあるがわれわれがやると失敗が多い。」と仰せられ候ことよく記憶致し居り候。」とも記している。赤彦は「歌のしまりは下句にあると言って、重心を下句において作り、下句をしっかり作っておくと歌は作り易い」とはっきり言っていたと新之介は語っており（前掲「赤彦の北海道旅行」）、これが赤彦の平生行っていた作歌法であったことは赤彦の手帳を覗いた翠坡や観蛍の言葉によっても証されるであろう。

赤彦は前日に狩勝峠を越えた感激を歌に詠もうと努めたが、諦めたらしく、「狩勝は大き過ぎる。歌にはならぬよ。」と仰せられ候。」

とも新之介は書いている。

小樽を出るときには旭川で一泊する予定であったものの、前夜島ノ下で一夜を過ごした赤彦は、旭川では宿泊することなく、宿をとって休息しただけで出発している。

「御乗車の時間になり候時、それまで旅館の浴衣を召させ候ものと思ひ居り候ひしかの白地の単衣に帯をくるくると締め直し、三尺手拭の真中より二つに折りたるを無造作に腰にぶら下げ、藤製のバスケットを一つ携へてお立ちなされ候。そのあまりに素撲簡易の御いでたちにひたすら頭の下がるを覚え申候。」とも新之介は記している。(9)

新之介と話をしたのは二時間ほどで、午後十一時三十分旭川発の汽車に乗車した。この汽車は旭川駅始発の函館桟橋行の普通列車である。大正六年の六月の時点で旭川から小樽までの所要時間は約七時間であった。赤彦は十三日の朝六時三十五分に中央小樽駅に着くと停車時間の十分程の間瑞穂と会い、それから途中下車することなく、函館に向かい、定刻どおりならば午後四時二十二分に函館桟橋駅に到着した。

五

北海道を離れたのは八月十三日の夕刻である。

青函連絡船は函館港を午後五時十五分に出航した。青森港に午後十時に着くと、青森駅発十一時の奥羽本線に乗り、翌十四日の朝六時半過ぎに秋田県の大曲駅に下車した。

駅前の伊藤旅館に宿をとった赤彦は、農事試験場陸羽支場（後、奥羽試験地）を訪れて、来意を告げて戻った。朝食をとっているところにかねて面会の希望を寄せていた同支場勤務の丹羽富治（筆名、丹羽富二。大黒姓）が訪ねてきて初対面の挨拶をし、富治からの連絡でやはりアララギの会員の高橋哲之助、佐藤民司も来た。

赤彦は「歌は休まず作れ、休むと駄目になる。歌友は親しい者二、三人で語れば足りる。多人数集ってガヤガヤ騒いでもためにならぬだらう」（「島木先生と秋田」『アララギ』「島木赤彦追悼号」）と三人に指導した。

富治は「「北海道に恰度D君――中央の或歌人――も行って大々的に歓迎短歌会なども開かれてゐた。僕はさういふ事は好まない方で」など言はれた。」とも書いているが、ここに「中央の或歌人」と言うのは、土岐哀果のことである。哀果は赤彦が旅行したのと同じ大正六年八月に北海道に旅行し、翌七年十一月に旅中の作品をあつめて東雲堂書店から『緑の地平』を上梓している。その中には「余市を過ぐ」と題した、

路ばたの棚すれすれに汽車は過ぎ、みどりくるめく林檎の畑。
ひとかたまりこもる光はたへがたし、林檎はそだつ緑のなかに。
葉がくれに実はひそむかと、青青き林檎の幹に身を近づけつ。

など余市の林檎を詠んだ六首の歌も収録されているので、哀果は余市にも寄っているかも知れない。赤彦は前年斎藤茂吉に加担して哀果と論争しているが、旅行中に哀果について何か見聞するところがあり、その目につく言動にも異和感を覚えていたのであろう。

富治たちは今夜歌友を集めて歌会を開くからよい宿に移り一泊するようにと強く勧めたが赤彦は「「門間君が待ってゐるから、病人に嘘を言つては悪い」と言つて同地を発った。富治は、「到頭午後二時の汽車で大曲駅をたたれたのでした。」（同上）と回想しているけれども、これは記憶の誤りで、午後一時十四分大曲発の汽車に乗

ったのである。

山形駅も過ぎ、茂吉の郷里金瓶村近辺を通過する頃には車窓の左手に夕かげの中に蔵王連山の山容が仰がれた。結城哀草果からも面会したいとの希望が出ていたらしいが、下車の回数制限もあり、途中で下車することなく、夜の午後十時二十五分に終着の福島駅に到着した。

翌日赤彦は門馬春雄を三郡共立病院に見舞った。信夫郡瀬上町で醤油醸造業を営む資産家の家に生まれ、芸術的資質に恵まれた春雄は、早くから俳句や短歌を作り、長塚節に傾倒した。大正四年の二月に節の死に遇った後、大正五年五月に斎藤茂吉と高湯温泉に遊び、九月からは茂吉の選を経て『アララギ』に作品を発表していた。すでに肺結核に罹患していた春雄はついに喀血、病床に臥した。三郡共立病院には旧制一高の生徒の頃から澪筑子の号で俳句を作り、俳人としても名を知られていた正木不如丘[10]がいたが、門馬家に寄寓していたホトトギス派の俳人佐久間法師[11]はそのことを知っていて、往診を依頼に来た。入院した春雄は療養し、やがて軽快に向かって退院したものの、大正六年の三月に第二次の喀血をした。それで、赤彦が訪れたときには再びこの病院に入院していたのである。

茂吉は八月五日付で春雄に宛てて、赤彦が訪ねたら「正木院長もよろこぶ事だらう。」と記しているけれども、不如丘は院長ではなく、内科部長であったらしい。

不如丘は、赤彦の長野師範在学時代の校長正木直太郎の子供で、附属小学校で教生をしたときに高等科二年（現在の小学校六年）に在学していた不如丘のクラスを担任した。正木俊二は当時の赤彦が最も可愛がった教え子の一人であった。百穂が見舞い、茂吉も見舞いに行きたいと書簡を送っているくらいであるから、赤彦が旅行の帰途、ここに寄ることにしていたのは当然であったのである。

赤彦は旅行から帰ってから、高橋哲之助に宛てて「門間君は大へん宜しうございました。」（八月一九日付書簡）と書いているから、春雄の病状は外見にはそう悪くは見えなかったのであろう。しかしこの後二年も経たないうちに春雄は死去したのである。[12]

赤彦の来訪当時のことを回想して、後に不如丘は「わたくしはその頃妻を迎えて一家を構へて居たので、歌人島木赤彦でなく恩師、久保田先生のために心をこめて歓待した。」（「霧の中」）と書いているから、このときには不如丘の家にも招かれたのであろう。

もっとも不如丘の記憶にも正確を欠くところがあり、「先生は数日滞在されて春雄を度々見舞われて帰京されたが、」と不如丘が記しているのは誤りである。赤彦はこの日はアララギ会員の伊藤五郎、壱岐信悟の両人にも会っているが、東京に帰着してから、前日に大曲で会った丹羽富治に宛てて「福島ではあの翌晩出立して帰京しました」（大正六・八・一九付書簡）と書いており、また八月十日に加納巳三雄に送った瑞書には「北海道より十六日に帰京」と記しているから、春雄を見舞った十五日の夜行列車に乗って帰京したのである。

福　島

阿武隈の川の雨雲低く垂り水の音かそかに夕さりにけり

縁側の竹の柱の冷やひやと夜は更けにつつ近き川音

みちのくの旅のをはりにいささかの酒に酔ひ寝ぬ夜の雨の音

これらの三首の歌は、多分十四日と十五日の両日の作をこのように排列して形を整えたものであろう。

赤彦が家に帰り着いたとき出発する前に郷里に戻しておいた家族は帰京しておらず、留守を守っていたのは同居していた藤沢古実一

人である。すでに二十歳の青年になっていたものの、古実はまだ神田正則中学校の生徒で学校があり、帰省の暇がなかったのである。

旅行中に庭の草の伸びたのが目につき、季節の推移したことが感じられた。

夕まぐれ縁にのぼれるこほろぎはいとけなければ未だ鳴かざらむ　（「家に帰りて」）

おのづから秋づきぬらむ庭の上の雑草の穂の動くを見れば

籠り居の眼のおとろへの著るく笑みて迎へし馬吉あはれ

馬吉というのは古実の筆名で、前年まで葉山雫を筆名としていたが、この時には赤彦に名付けてもらった木曽馬吉という筆名を用いていたのである。

旅立つ前に斎藤茂吉と古実に『アララギ』の九月号の編輯の仕事を頼んで出発した。赤彦はその残りの仕事を片付け、折から諏訪の講習会で講義を済ませて上京した石原純を迎えて二十一日の午後から夜にかけて歌会を催した。その翌二十二日に赤彦は帰郷した。

赤彦を迎えた父の浅茅は、報告を聞いてその労をねぎらったが、瑞穂の問題についてむろん不同意の意思を変えることはなかった。瑞穂の桜永愛と結婚したいという熱望はこうして周囲の人々の祝福を受けることのない、内縁に近い関係のままにとどまることになり、一応の決着がついたのである。

六

北海道旅行の作品は、『アララギ』のほかに『大阪毎日新聞』『早稲田文学』などに発表されている。この旅行の歌について言うなら、往路の「岩手以北」の歌や復路の「福島」の作などを含めて旅行にかかわるすべての作品を対象にしなければならないであろう。しかしここでは北海道詠の一部について簡単に触れておくことにする。

北海道詠が始めて発表されたのは、旅行から戻って二か月半余り後の十一月八日の『大阪毎日新聞』夕刊紙上である。「奥蝦夷一」と題して次の二首の歌が掲載された。

平らかに蝦夷の楢原曇りたり歩み止まらぬ我は旅人

あゆみゐる我に向ひて音もなし赭土原に曇れる大川

赤彦がこの間苦吟推敲に努めていたことは、たとえば大正八年三月号『アララギ』の「阜上偶語」に、伯母たかの展墓の歌の一首について、発表作とするまでにどのような経過をたどったかの苦心を述べている次の一文によっても窺うことができる。

「北海道で作った原作は「おほ伯母の墓は磯べの墓の原海より風の吹きやまぬかも」あつた。第四五句がどうしても据らぬ。第一二三句が漸層的になつて、夫れを第三句の名詞で強く受け止めてゐるために、第四五句が一層強いものでなければ勢を成さぬのである。そこで「吹きてし止まず」「大き海より風吹き止まず」「暗き海より風吹き止まず」其の他いろ色々に考へて四五日を費やした。しまひには頭が分らなくなつて馬吉に相談した。馬吉は此の場合四五句が七七音では上句に対して弱いと言つた。此の言非常に当つてゐるのである。これから余は漸く見当がついて、その翌晩の三時頃「海より風の吹く音止まず」を得て、馬吉を起して聞いて貰つたのである。併し「音」は未だ小生の気にかかつてゐる。」

その後北海道詠は、大正七年三月号の『アララギ』にまとめて掲載された。「奥蝦夷」の総題のもとに、全体を四部に分けて、一と二を各八首、三と四を各七首とした全体で三十首の連作である。

このうち後半の三と四は、一首を除いて伯母展墓の歌で統一されているけれども、一と二には余市の歌と島ノ下の歌とが交じっている。

これらの歌は、大正九年六月に『氷魚』を上梓するに当たって、原題の「奥蝦夷」を「北海道」と改め、歌句の一部に手を加え、一、二から一首ずつを減じた各七首を其一、其二とし、三から一首を減じて四とあわせた十三首を其三として、三部二十七首の作品として完成された。[13]

北海道詠のモティーフをなすものは、冒頭の一首、「平らかに――」の歌に認められる。「蝦夷」という言葉によって表現された内地と風土を異にする北海道を遠く旅する赤彦の「我は旅人」との自覚に根ざす寂寥の思いである。『奥の細道』の旅における芭蕉の面影が揺曳しているように思われるのは、往路で松島や中尊寺など芭蕉の訪れた名所に立ち寄ったことが影響しているであろう。『奥の細道』の旅における芭蕉の「閑さや岩にしみ入る蟬の声」は著名な句であるが、中尊寺で蜩の声を聞いたことを中原閑古に書き送っていた赤彦は、この北海道詠においても蜩の声を詠んでいる。[14]

右の冒頭の歌の結句については、前田夕暮の歌集『生くる日に』（大正三・九　白日社）の中に、

　黝みたる海はうづまき大空は風焼けすなりわれは旅人

の先例[15]がある。大正三年一月に南上総に遊んだ折の作として、この歌集の第一部「外海と岬」の第一首に置かれている。赤彦は同年十二月号（第七巻第一一號）の『アララギ』に「「生くる日に」雑感」を書いているから当然目にしていたはずの歌である。赤彦はそして、「調子」と「叙述的」であることを欠点として指摘していたとはいえ、この歌集に対しては高い評価を与えていた。しかしながらその赤彦は、大正五年九月に夕暮が『深林』を刊行すると態度を一変し、同年十二月号の『アララギ』に「歌集「深林」の著者に呈す」を書き、「歌はむとする内容動機が、多くの場合決して重大な境地に立つて居らぬに関らず、如何にも重大らしい厳粛らしい深遠らしい語句を陳列して一通りの外観を整へんとしてゐる」として厳しく批判した。「一般に外延的であつて、包含に乏しい。平面的であつて、厚みに欠けてゐる」ことにおいて『生くる日に』よりも一段と悪化していると言って酷評したのである。

夕暮と上述のような関係をもった赤彦が、北海道の連作の冒頭の一首に、しかも正岡子規以来一首における最重要な句としてきた結句に、夕暮と同じ句を据えた理由については明らかではない。あるいは赤彦の脳裏からは夕暮の歌は忘れ去られていたのであろうか。

そのことはともかく、「我は旅人」の深い感慨が赤彦を浸していた。それはこの当時において北蝦夷の地の果てに立ち、ここに生を終えた伯母を追慕し、さらに奥地深くに旅する赤彦のおのずからなる感慨であったであろう。

「写生」とは単に事象を描写することではなく、写すことがすなわち自己の生を表現することであると考えていた赤彦は、さきに太田水穂が「写生」を著しく主観を忌避するものとして批判したのに対しても、「余の写生を尊重するのは、真実なる主観の表現を尊重する心から出てゐる」（前掲「太田水穂氏に与ふ」）と主張していた。北海道詠においてもこの主張を実作によって示そうとする気持ちが強く赤彦を動かしていたであろう。二十七首の中で海を六首に、笹を十二首に、森を三首に、また「曇り」をあらわす言葉を八首にも用いているのを見ると、これは対象を確実に把握し、調子を緊密に

し、自己の内面に透徹しようとするなら、歌材を取捨し極限せざるをえないとしていたのを、そのまま実行しようとしていたためと思われる。同時に、「我」「わが」などの言葉を八首にも使用しており、赤彦が主観の表現にいかに苦心していたかを窺わせるのである。

掘りたての小屋に縫ひゐる赤き帯この森の中に娘となりて
家裏の畑の馬鈴薯掘る母の尻に物言へりまる裸の子
移り来し人竝び住む小屋づくり親しましもよ蕎麦畑の中に

これらの歌には生まれ故郷を遠く離れてこの地に住み着いた人々の乏しい生活の営みに寄せる赤彦の心情があらわれている。ここには後年の満州旅行の歌にも通ずるものが見られるが、このような歌材の選択においても主観が表現されているのである。

瑞穂に関わることはこのようにして背後に退き、「小樽に弟を訪ふ」の一首にわずかにその痕跡をとどめることとなった。用務を帯びての旅が作歌の上では創作のための旅となったのである。

北海道詠の評価については、高田浪吉のように、「力作には違ひないが、力瘤が目立つ作品なのである。内に籠る強さが、赤彦の理想通りに現れきれていない憾みがある。」（「歌集氷魚時代」『島木赤彦』）とする評者がいる一方、横山武夫のように、「幼稚な主観的な発想に終始していましたその頃の私が、赤彦の北海道行の作歌（そして『氷魚』の歌全体にわたって）に接して感動を甚だしく致しました事実は、これらの北海道行の作歌の中に、私の心を強く捉えた作者の大自然や人生に対する誠実にして真摯な感動と、それを自己の軽々しい主観の道によるという態度ではなく、謙虚に対象を凝視、それもいわば全身全霊とも申すべき凝視によって対象の内なるものを作歌に現成していっていることへの驚嘆でありました。」（「わが心の島木赤彦」百四十二話）と高く評価する者[16]もいて、定まっていない。

この北海道詠には、たとえば冒頭の一首に「我は旅人」とあるのを始めとして、「われ」という言葉を八首に用いているなど、力瘤が目立つと批評されても仕方がないような欠点が見られる。三句切、名詞止、終止形止の歌が多いのも流動感を乏しくしている。加えて二つの土地の歌を一つにしたことから、連作としての統一性の面で大きな欠陥を内包することとなった。

しかしながら、北海道詠における赤彦の姿勢は積極的である。それは、たとえば、芥子沢新之介に、名詞止はいけない、われわれがやると失敗が多い、と言いながら、二十七首中の六首を、特に其一においては七首中の三首を名詞止にしていることにも表れている。字余りの歌を多く交えているのも同様な意欲のあらわれであろう。このような苦心によって練り上げられた北海道詠は、赤彦の硬質な抒情に相応しい重厚な作品として完成されたのである。

土田耕平が『氷魚』を批評し大正六年以後の歌について、「飽くまで強く確かなる足どりを以て、ひとり曠野の道を邁進するの慨がある。歌に潤ひとか余情とか、さういふものは缺けてゐるが、打てばかんかんと響きを発する鋼鉄の強みがある。」（「『氷魚』を読みて」（『アララギ』大正一〇・三）と評し、「成就された大作」の中に「北海道」の連作をも挙げたのは、当を得たものといってよいのではなかろうか。

北海道詠はさらにこの旅行詠全体の中に置いて見る必要がある。『氷魚』に収めるに当たって改訂を施した際、「福島」の作の後に「北海道行の歌大正七年改訂」と注記しているのも、旅行詠を一体のものとして見てくれるよう、読者に要請しているようにも思われ

る。旅行詠の中核をなす作品として見るとき、「北海道」における赤彦の力みも、それほど不自然なものとは感じられないであろう。

狩勝峠越えの歌が一首含まれていない理由は明らかではないが、連作としての纏まりを考慮したためであるかも知れない。同時に、赤彦が狩勝峠を越えたあと不二子に書簡を保存するようにと指示していることからその歌を作るつもりでいたことは確かであるのについに発表されることなくおわったについては、芥子沢新之介に語ったように、この時期が赤彦の力量をもってしては困難であったからでもあったろう。赤彦がそのような大きな景観を詠むことができるようになるのには大正十一年十一月号の『アララギ』に掲載した「九月二十二日姨捨駅」（『氷魚』では「九月二十二日姨捨駅にて」）の作あたりまで待たなければならなかったように思われる。

七

この北海道旅行は赤彦自身にとって収穫があったのはもとより、旅中の赤彦に出会った地方の人々にも深い印象を残し、その作歌欲を燃え立たせた。

たとえば『島の下郷土史』にも、「島木赤彦が富良野へ来たことで、観蛍ほか潮音派歌人も大いに奮い起って、作歌に精進したということである。」と記録されている。

小田観蛍は、「北海道短歌史私記」の中で、「赤彦が突然私らの例会をしている島の下教育所を来訪し、一夜われわれと、特に観蛍と語り合ったことは、あるいは北海道歌壇史として、没却できないもののように思っている。」と記している。「われわれ」とは、言うまでもなく、佐野翠坡・小田観蛍のほか、赤彦が島ノ下で出会った三上煤煙子・流王帰去来・宮川黎明（桃舟）等である。

観蛍について少しく補足しておくと、大正八年十月に第一歌集『隠り沼』を上梓し、一躍歌壇にその名を知られた。大正十四年に富良野から小樽中学校に転じた後、昭和五年一月に歌誌『新墾』を創刊、千余の門弟を擁する結社の主宰者となり、歌人として大きな足跡を残したことは知られているとおりである。

三上煤煙子も『潮音』に属したが、やがて短歌から俳句に移り、大正六年富良野において土の香会を結成して富良野俳壇の源流となった。晩年には荻原井泉水の『層雲』にも作品を発表している。流王帰去来、宮川黎明も『潮音』の作者であり、一時期道内潮音派の最大の拠点となった富良野歌壇の草分けとして数えられる人々である。

大正期の北海道においては、文芸に関心を持つ青年たちの目は、ひとしく中央に集中していた。しかし上京の経験のある者はきわめて少数であった。観蛍が最初に上京したのも大正九年八月になってからである。

中央から来道する歌人がこうした状況の中において熱烈に歓迎されたことは想像に難くない。

赤彦が北海道に旅行するまでに渡道した歌人に誰がいるかをみると、殆ど、定職を求めて渡道した石川啄木只一人であるといってよい。吉植庄亮が明治三十年に、平福百穂が明治三十七年の五月と四十年の八月の二度にわたって渡道しているけれども、庄亮の渡道は少年時代のことであり、百穂は歌人というよりも画家であった。古泉千樫が渡道したのは大正八年で、しかも札幌より奥には入っていない。太田水穂、四賀光子夫妻の渡道は大正十年八月で、これも札幌以北には足を踏み入れなかった。北原白秋、長谷川銀作が道内に足跡を印したのは大正十四年（庄亮も渡道している）である。若山

牧水、喜志子夫妻の道内行脚は二か月にわたる長いものであったが、大正十五年であった。斎藤茂吉や土屋文明などの渡道はいずれも昭和になってからである。このような中で赤彦と同じ大正六年の八月に土岐哀果が旅行しているのは注目すべきであるが、哀果は余市、札幌、函館近辺をまわって帰京しており、赤彦のように奥地深くは入っていない。

赤彦はこのようにみると最も早い時期に北海道を旅した中央の歌人である。しかも道内深くに入り、観蛍、新之介など後年歌壇で活躍することになる人々と会って語り、大きな刺激を与えたのである。

観蛍は『潮音』及び自身を中心にして叙述しているが、赤彦の渡道は、芥子沢新之介を見出し、育てる機縁となるなど、写生歌風の北海道への展開という面からも考えられなければならない。

新之介は明治二十七年三月に新潟県の酒造業者の家に生まれ、同三十六年、一家と共に北海道に移住した。赤彦に目を掛けられることになった次第について、「アララギは赤彦先生の時代だつた。先生が北海道に来た。「北海道会員みな棒折れして腑甲斐なしキミしつかりやれやれ」と言つてくれた。以来赤彦門に属した。」と書いている（「年譜」『いしかり』昭和三八・四）。また、「二十才で早実から帰つて来て父祖の業の酒つくりを手伝つて、そこで自分も育ち、兄たちや周りのやからも仕合せにしてやらうと思つた少年の夢が、無惨になつた時に札幌へ飛出した。その時思つたのが、どうせ世間の下積みで暮らさねばならない一生だらうから、それなら世間なみでないところでガン首を出してやらう、と決めたのが僥幸にも赤彦先生に取り立てられたのだ。」とも記録している。旭川で赤彦と出会い、目をかけられるようになったのは、新之介にとっては、「僥幸」であったのである。旅行を通して北海道にも視野を広げることになった赤彦としては、新之介に自派の歌風を北海道に広めるための役割を期待したのであろう。

赤彦の期待と励ましに応えて新之介は、『アララギ』に出詠する一方、大正七年に札幌で創刊された『冷光』に同人として参加する。「遠い昔、駈け出して赤彦門で寵を得た頃は、夢中だつたし真剣でもあつた。」（「厳しさといふこと」『いしかり』昭和三三・五）と後年回想している。『冷光』が一時休刊、大正十年に復刊した時には自宅に発行所を置くほどに作歌活動に全力を傾けた。

この新之介も大正末年赤彦の不興を買い『アララギ』を退会せざるを得ず、北原白秋門に転じたのは惜しまれることであったが、写生歌の道内への展開という面からみて、その果たした役割については十分に評価されなければならない。

その後、新之介は道内最大の歌誌となった『吾が嶺』を昭和二年に創刊、十年間これを主宰し、さらに昭和三十一年には『いしかり』を創刊、主宰して昭和四十一年八月に没している。

なお赤彦は、北海道に旅行した翌年の大正七年の春に三男の周介を郷里から呼び寄せて同居させているが、この時に余市から三溝与八朗の長男与市も上京させて自宅に置き、目白中学校に通わせている。このこともまたこの旅行が契機となったのである。

北海道に旅行した大正六年は赤彦が歌風を樹立した年であると同時に年末に長男政彦の死に遭って人生行路に一大転機を迎えた年でもあった。この年に行われた北海道への旅行は異母弟瑞穂の一身上の問題に始末をつけるという実生活の必要に発したものであり、また二週間に満たない短いものにすぎなかったけれども、しかもなお、このように多くの面にわたって意義を持つものになったのである。

おわりに、その後の瑞穂と桜永愛とについていくらか述べておきたい。

瑞穂と桜永愛との仲は内縁関係のままに年が暮れた。そして翌大正七年七月十八日父浅茅が病没し、塚原家の家督は同腹の兄の葦穂が嗣いだ。大正七年八月号の『アララギ』の「編輯所便」に赤彦が「小生九月下旬北海道に参り申すべく候」と記しているところをみると、赤彦はこの時には再び渡道することを予定していたのであろう。あるいは瑞穂と愛の問題についても何らかの解決策を考えていたのかも知れない。しかしこの予定は実行されることなく終わり、渡道することなく時が過ぎた。

その後大正十年に三溝与八朗が金鉱山の事業に手を広げ過ぎて失敗し、台湾に行方を晦ますという事件がおこった。赤彦は瑞穂に対して、「貴下多年の恩に酬ゆる秋なりと存じ候出来る丈け力を尽し誠実に御助力祈上候」（大正一〇・四・一三付書簡）と書信を送って激励し、与八朗が余市に戻るまで三溝家の薬種業を援助するようにと指導した。しかし、瑞穂が勤務先の谷黒薬局の主人に退職を申し出て了解を得た後で、三溝家及びその親戚との間に話が順調に進まなくなるということがおこった。進退に窮した瑞穂は、谷黒薬局の主人にすがり、その好意で小樽の稲穂町に星製薬販売所を出して貰い、自分が主任となって九月二十五日にホシ薬局を開業することになった。（ホシ薬局はその後小樽の花園町に移った。）

この時に桜永愛の塚原家への入籍のことが改めて問題になったのである。

赤彦は長年瑞穂が親代りとして世話を受けてきた与八朗に事情を記した書簡を送り、「右にて例の妻入籍必要になりし由小生及葦穂へ申し来り候」と記し、「多年の事に有之今更如何様にもなり申すまじく亡父もつまり仕方なしと申し居りし事なれば」と自分としては入籍を認める意思を伝えた。そして葦穂のもとへも愛の塚原家の戸籍への入籍を認めて手続きしてやるように書いてやった。瑞穂と桜永愛とはこのようにしてここに正式に結婚が認められることになったのである。愛が塚原家に入籍した大正十一年一月には、瑞穂は数え年三十歳、愛は三十二歳になっていた。

注

(1) 赤彦は大正二年に瑞穂が北海道で徴兵検査を受けることになった時にも「弟の徴兵検査に」と題する五首の歌を詠んで同年七月号の『アララギ』に発表している。

奥蝦夷の草萌えたらん裸にて体ばかりにかゝりてあらん
公の徴しに召されて今は行く身は細々とやさしかるかな
やさしく汝れを生みたる父母は手を額にしてうれひたまへり
裔のみなぎりさかる皮膚の張りわかき男の裸体おもほゆ
島に住む男のからだ気の張りの少しよはりて草をふむらん

(2) 幸田露伴が「雪紛々」においてシャクシャインの悲劇を取り上げたのは余市電信分局に勤務した時に材を得たのであろう。露伴は明治十八年七月、十九歳の時に十等電信技手として余市に赴任し、同二十年八月まで同所に勤務した。その間、みずからアイヌの生活を見、また、沢辺の永全寺（曹洞宗）の東開和尚のもとに出入りし、和尚からアイヌの話を聞いている。

(3) 偉星北斗が大川尋常小学校を卒業したのは大正三年である。大正六年頃には夕張線登川付近で木材人夫として働いていたらしい。

(4) 狩勝峠の名称については『南富良野町史』下巻（平成三・三　ぎょうせい）に「狩勝の呼称の起源は、明治二九年（一八九六）、臨時

北海道鉄道敷設部技師工学博士田辺朔郎が、官設鉄道十勝線決定際、石狩国と十勝国の国境にある所から、国名の一字ずつを採って狩勝と名付けた。」とあり、「道央と道東を結ぶ交通の要衝で、道内で最も有名な峠であった。」「現国道三八号線が、落合からパンケ・ユクルペッペ（ペイユルシェペ川、狩勝川）を登りつめた峠である。」との説明がある。

昭和七年八月二十五日にこの峠を汽車で滝川方面から越えた斎藤茂吉は、峠の展望を歌に詠んでいる。その作は歌集『石泉』に収められ、『作歌四十年』ではその中から次の三首を引いて自注を加えている。

狩勝の峠に動く白雲はここに極まり嶺をこえなくに
くもり風いまだ吹けども狩勝の分水嶺はきはまるらしも
狩勝の峠こゆればみち足らふ山川背し晴れにけらしも

（5）赤彦は長野師範四年生の夏期休暇を利用して朝鮮に渡るべく旅立った忠三と共に九州まで旅行している。長野に戻って後、旅中の作品をあつめて『西水行吟』を作った。忠三は師範学校卒業後、郷里の上伊那郡に帰って小学校の教員になったが、明治三十六年諏訪の高島小学校に転じ、翌年玉川小学校から転任してきた赤彦と同僚になった。しかし校長岩垂今朝吉と合わず失意の三年を送った。その間に痔疾を患い手術をしたが続いて肺結核に侵されて房州に転地療養した。赤彦はこの時に「友大森忠三病みて癒えず」と詞書して、

君かつて蝦夷の野辺行き山辺行き黒金なせる足も痩せたり
志いまだも成らず荒玉のとしの三十路を妻なしに病めり
天雲の高き望を年ながく我知るからに涙し流る

という三首の歌を詠んで忠三の不運に同情している。忠三は明治四十年十二月十日に三十二歳の若さで郷里に没した。赤彦は守屋喜七、橋本福松、岩波茂雄などの知友と図り、大正十三年七月その生地長野県上伊那郡朝日村に墓碑を建てた。その墓碑は赤彦が揮毫したのである。

（6）新得駅前に据えられた「火夫の像」の台座に嵌めこまれた銅板には次の文字が刻されている。「（前略）この狩勝峠は千分の二十五の急勾配で頂点には九百五十四米の魔のトンネルがあり補助機関車をつけた列車は四十分で一トンの石炭を投炭しトンネルに入るや運転室の中は摂氏五十度前後となり逆まく煤煙と熱気に息をつまらせ濡れ手拭いで顔を覆い通過したという（後略）　昭和五十六年七月　新得町商工会」。

（7）大正六年の年末に観蛍の妻たみ子が死去したとき、赤彦は悔み状を送ってその不幸に深い同情を示している。たみ子の死は赤彦の長男政彦の死と同月であった。その後観蛍が大正八年十月に第一歌集『隠り沼』を上梓したときにも、赤彦は『アララギ』に歌集評を書き、「環境に対して真面目な態度を持してゐる作者の人柄が想像出来る。自己の心に対しても詞句に対しても放縦な通り方をしてゐる歌の多い歌壇で、この集の如きは真面目に繙くべき歌集である。」と高い評価を与えている。特に亡妻追慕の「面影」の連作については「皆真実の響きの籠った歌である。」と評し、「今の氏の態度をずんずん押し進めて行けば追々に冴え且つ澄んでくるであらう。」と今後の成長に期待を表明している。「概して氏の歌はアララギ調である。さういふことを作者の自覚して居らぬやうなことはあるまい。（「歌集「隠り沼」」『アララギ』大正九・一）と書いているのは、観蛍に相当好意を持っていた証ともいうことができよう。赤彦のこの歌集評は当時の他派の歌人に対する批評としては最大級の褒辞を用いたものであるといっていいが、しかし『アララギ』との間に対立的関係を強めていた『潮音』の佐野翠坡はこの批評にも満足せず、大正九年二月号の『潮音』誌上において次のように論じている。「その風格

の万葉調なるを以て、君を直ちに万葉の追随者であるかの如く見做すものがあるが、余は根本的に見解を異にしてゐる。勿論君は万葉に私淑する点は多いのであるが、理知的に同化しようとする努力を続けたのではなく、万葉の声調も形式も、純真素朴なる君の性情に順応し、胸奥深き必然の要求に基づいて体現された風格そのものと、偶々びったりと結合するに至ったものと思はれる。」

(8) 小田観蛍の喜寿を記念して発行された『小田観蛍略年譜』(昭和三八・七　新星書房)所収の「小田観蛍全歌集」の大正六年の頃には「八月、島木赤彦を同地島の下に迎へ諸友と共に同宿す。」とある。この記述も「二人一室で寝た」のが島の下教育所の宿直室ではなかったことを示している。

(9) 旅中に出会った青年たちの脳裡に深くのこった赤彦の印象は、真率な態度や作歌への情熱と共にその飾らぬ旅装であったらしい。大曲で赤彦に会った丹羽富治も、「この時の先生の旅装は、縞の木綿の単衣にパナマ帽をかぶり一本の洋傘を持たれた許りの簡単で地味なものでした。この姿はいかにも尊く今も判然と印象に残ってゐる。」(「島木先生と秋田」『アララギ』「赤彦追悼号」)と書き残している。

(10) 正木不如丘は明治二十二年二月に生まれ、長野師範学校の附属小学校を卒業して後、独乙協会中学校から旧制第一高等学校に進学、東京帝国大学医科大学卒業後、福島の三郡共立病院に赴任した。同病院を退職してからフランスに三年間留学、慶応大学助教授を経て、長野県諏訪郡の富士見高原療養所の所長となった。昭和三十七年七月三十日肝臓癌のため死去した。

(11) 佐久間法師(明治一一・五生)は門馬家に寄寓する以前に長塚節と交流があり、関東大震災の後正木不如丘の紹介で春陽堂に入社し、赤彦が編纂に従っていた長塚節全集の仕事なども担当した。その後不如丘に招かれて富士見高原療養所に移り、会計係主任を務め、昭和五年に同所で没した。

(12) 門間春雄はその後回復して退院し、大正七年一月には上京しているが、肺結核が悪化して、大正八年二月十三日に数え年三十一歳で死去した。赤彦は大正八年三月号の『アララギ』の「編輯所便」で春雄の訃を報知すると共に、その近作を掲げて弔意を表している。

(13) 大正十四年五月に刊行した自選歌集『十年』では赤彦は北海道詠から六首を録している。そのうちの五首は余市の歌で、五首中の四首は伯母たかに関する歌である。

(14) 「北海道」の連作の中で蜩を詠んでいるのは次の一首である。

　雨曇り暗くなりたる森の中に蜩鳴けば日暮かと思ふ

ただし道南を除いて北海道に蜩は棲息していないことから、赤彦が耳にしたのは実際には蜩の声ではなかったであろう。晩年の歌集『柿蔭集』の「峡谷の湯」の中に次の歌があるが、この歌に詠まれた「深山雀」とはメボソムシクイのことであろうという。

　山かげに深山雀といふ鳥の蜩に似て鳴くあはれなり

(15) 夕暮はこの歌の結句を後に『自叙伝体短歌選釈　素描』(昭和一五・一二　八雲書林)では、「黝みたる海はうづまき大空は風焼すなり旅人われは」と改め、次のように注釈を加えている。「九十九里つづきの外海は、黒潮が渦を巻いてゐるやうに感じられ、水平線はギザギザだ。その黝い外海の上に大きな風焼けした空が傾いてゐるのを、砂浜に立つて展望してゐると、人間は自然に寂しくなるものだ。そして、旅人吾は、といふやうな気持になる。」

(16) 横山はまた、「私が作歌の上で洗心されたと申してもいい、赤彦の「北海道」一、二、三、」とも言い、特に、其一については、「小主観に堕していまして、徒らに甘い次元で作歌していました二十代初期の私にとって、赤彦の右のような歌に接しましたとき、何か鉄槌をもって頭を打たれたような驚嘆をおぼえました。云々」(「わが心

の島木赤彦』百四十三話）とも語っている。

(17) 新之介は『アララギ』を脱会したあと、北原白秋系の村野次郎の主催する『香蘭』を経て白秋門に属したが、その間の事情について、本文で引用した「駈け出して赤彦門で寵を得た頃は純真でもあったし真剣でもあった。」に続けて、「純真すぎて赤彦門を縮尻った。酒井が白秋門へ連れてってくれた。香蘭、多磨。そこでも一心に努めた。走って息が切れるまで師白秋の下風を逐ふたが、数年にして息切れと共に並足に戻った。自己に求める厳しさなどまだ兆しはしなかった。」（「厳しさといふこと」『いしかり』昭和三三・四）と書いている。また、「土田耕平の「青杉」が出来て、それの販売手順にミスをでかしたら赤彦先生に怒られた。以来浪々。腐ってゐるとき広治が「俺たちのところへ来ないか」と村野君の「香蘭」へ連れていってくれた。これが白秋門に参入のはじまり。「多磨」が生れて参加して、一部会員に入れられて、一人前にして貰った恩義が白秋先生にはある。」（「雀の子ほか」『いしかり』昭和四〇・五）とも書いている。『青杉』が刊行されたのは大正十一年の三月である。